第1章 ビジネスにおける人工知能の役割

1.1 人工知能の歴史・ブームと冬の時代

人工知能（AI）という言葉が初めて公式に使われたのは、1956年のダートマス会議とされる。当時の研究者たちは、人間の思考を模倣する機械を数年で実現できると楽観していた。しかし、その後の歴史は、期待と失望を繰り返す波のようなものだった。

1960年代には、ルールを人間が記述する「エキスパートシステム」が盛んに研究された。医療や法律の分野で、専門家の知識をコンピュータに入力する試みが進められた。1970年代に入ると、自然言語処理や画像認識の研究も始まり、AIは万能の技術になるかもしれないという期待が高まった。

ところが1974年、イギリスのライトヒル報告書が、AI研究の成果は期待に遠く及ばないと指摘した。研究費は大幅に削減され、AIは「冬の時代」に入った。1980年代に再び盛り上がりを見せたが、専門家システムの維持費が膨大であることが判明すると、再び冬が訪れた。

1990年代以降、インターネットの普及とコンピュータの性能向上により、データを大量に扱う手法が実用的になった。2000年代後半からは、ディープラーニングと呼ばれる手法が画像認識で人間を超える精度を示し、AIは第三の春を迎えた。